資料３　第２回検討委員会までの意見概要を、答申書の形式に差し込んだもの

答　申　書（骨子）-案-

胎内市立小中学校の適正規模等に関する検討委員会

１　基本方針

胎内市の教育の基本理念は「教育は人をつくり、地域をつくる崇高な営み」であり、その実現のために、「地域とともに歩む学校づくり」を中核に据え、「健康な心身の醸成」「豊かな人間性の確立」「確かな学力の修得」「ふるさとを誇りに思う人間の育成」を目指して取組を進めている。

しかし、全国的な少子化により、児童生徒の減少、学校規模（学級数及び１学級の児童生徒数）の小規模化が進み、本市においても同様の傾向が続くものと予測されている。

本市の小学校においては、旧村単位での統合を終え、校舎施設の維持や改修のめども付いていることから、市内５小学校を現状のまま維持する方向で進めることができると考えている。中学校においては、４校中３校については、１学年１学級の状況がしばらく維持できるものの現在の１学級２０～３０人の生徒数はさらに減少し、今後、小規模化の問題が特に懸念される。

こうした現状を踏まえ、今後の胎内市における、望ましい学校教育環境の整備に取り組むため、特に中学校の適正規模等に関する基本的な考え方（方針）、その実現に向けた方策及び配慮事項について答申する。なお、答申の内容は、小学校にも必要に応じて運用できるものと考える。

２　実現に向けた方策

(1) 学校の規模

文部科学省では、「小中学校の学校規模は、１２学級以上１８学級以下を標準」としているが、胎内市の場合は基本方針を踏まえ、以下を目安とする。

中学校は、地域とのつながり等を大切にしながら、社会性を育む観点から、１学年□学級以上を目安とする。なお、１学年□学級が実現できない場合でも、１学級□人以上となることが望ましい。

＜検討委員会より＞

・規模が大きいと多くの友達がつくれるのでよい。
・学級が複数ないと学級内のトラブルがあったときにクラス替えができない。
・２学級程度の人数を確保することが大切。
・２クラス以上あるとクラス替えができ、競い合える。
・１学級の人数が少ないと、きめ細かい指導ができる。

(2) 通学の在り方

文部科学省の通学距離基準（小学校４km、中学校６km）を超える場合は、児童生徒の安全、教育活動の実施への影響を考慮し、現行と同様にスクールバス等の交通手段の活用を図ること。その運行時間は、始業時刻及び終業時刻を勘案し、小学校、中学校ともにおおむね１時間以内とする。

(3) 地域と学校の在り方

＜検討委員会より＞　　○：よい点　△：課題　→：解決策　→規程等で定まっているもの

・地域にとって避難所機能が学校にはある。
△地域と子どもとの日常的なかかわりがなくなってしまう。
→コミニュティ・スクールによって、日常的にかかわる仕組みをつくることができる。
△キャリア教育は、地域とつながるよい取組であるが、統合したら密度が薄くなる。
→学校がない地域に子どもが積極的に足を運べる仕組みをつくる。

→子どもと地域が日常的にかかわる仕組みをつくる。
〇統合により地域間交流が活発になるのではないか。例えば各地域のお祭りに他の地域の子どもが参加すると交流が広がる。

３　配慮事項

(1) 統合しない場合

①　交流活動について

〇学校は勉強だけではなく、社会的自立、社会性の育成も大切である。
→他の学校との交流により、社会的自立、社会性の育成を工夫することは可能である。
△小規模校は子どもたちに競争心がない。いつも同じ役割をさせられる。それが嫌だから引っ越すという家庭もある。
〇小規模でもいろいろな役割を生徒に担わせている学校もある。
△大規模でも新しいことをしたいと思わない子どもが増えてきている。
→学校間の交流活動を積極的に取り入れたり、合同活動を設定したり、ICT を活用しての学習交流を行ったりする取組により、生徒の社会性を育むことができる。
△切磋琢磨させたいから、高校は大規模なところに行かせたい家庭も多い。

答申書文例：検討会での意見を、課題→解決策の文脈で成文すると以下のようになる。

小規模校は、子どもに競争心が育たない、いつも同じ役割をやらされる等の課題があるといわれるが、小規模校でもいろいろな役割を担って、活躍の機会を増やしている学校もある。大規模校は逆に、そのチャンスが少ないという問題も考えられる。小規模校であっても、学校間の交流活動を積極的に取り入れたり、合同活動を設定したり、ICT を活用しての学習交流を行ったりする等、工夫した取組により、望ましい社会性の育成や人間関係の構築を図っていくことができるのではないかと思われる。

②　通学について

△自転車で通うと体力がつくが、女子の通学が心配。

③　部活動について

△部員が少なくなると部活の成立が難しくなる。市内３中学校で連合してチームを作るのは理想だが、中体連の大会に出られず、全国も目指せない。
→中体連が認めれば大会に出場することはできる。
→胎内市として競技を絞って実施する。部活は校外の生徒と出会う場であり、競争心も生まれる。
→地域の受け皿を作っていく必要がある。

④　小中一貫校について

〇中学生が小学生の面倒をみるというメリットがある。

⑤　その他

→子どもたちの考えを聞いてみるのもよい。
→３０年後、５０年後の姿も考えるべき。
〇１学級の人数が少ないと子どもをきめ細やかに見られる。教師の事務作業も少なくなる。

⑵ 統合する場合

① ４校を統合する場合

ア）交流活動について

イ）通学について

△通学距離が伸びるので、中学校でもバス通学にする必要がある。

△統合すると通学時間が延びる。県内には往復２時間という学校もある。

△学校から遠いところに住んでいる子どもは登下校に時間がかかり大変になる。

△バスで通う児童生徒が増えて、児童生徒の体力の格差が出てくる。

ウ）部活動について

・３０年、４０年先を考えると部活動の形は、かなり異なるであろう。

→統合の視点として考えにくい。

エ）その他

・統合しても先生方の数は減らさないでほしい。

→教職員数は、学校規模により県教育委員会が定め、学校に配置している。統合すると、市全体として教職員数が減る。

△先生がいることが大事である。クラスが減ると先生も減る。この影響は大きい。

・教職員同士も切磋琢磨をして、指導力を高めてほしい。

・統合について地域の理解を図ることが大切である。

△特色ある教育活動のアピールが足りない。

② 小規模校３校を統合する場合（※上記の○、△、→はこの項も同様）

ア）交流活動について

イ）通学について

ウ）部活動について

エ）その他